

## 猫が日本の野鳥と生態系に及ぼす脅威

公益財団法人 山階鳥類研究所フェロー 岡 奈理子

猫ブームが起きた。日本で猫の飼育頭数は約1千万頭に達し、犬に並んだ。飼い猫、野良猫、ノネコに加えて最近では地域猫の呼称も登場したが、生物学的にみれば、北アフリカから中東地域に生息するリビアヤマネコを起源とし、「イエネコ」という標準和名を持つ。中東で約1万年前にネズミ防除目的で家畜化が始まり、農耕の伝播とともに世界各地に広まって日本列島にも持ち込まれた。生後半年で生殖能力を持ち、短い妊娠期間で4、5頭を産み、年に2回は繁殖する。だから1頭のメス猫が翌年には40、50頭にも増え、世界各地の生態系に脅威となり続けた。



国際自然保護連合（IUCN）はイエネコを侵略的外来種ワースト100の一つに掲げて自然地域、特に島嶼から除去する努力をしている。日本では鳥獣保護管理法と近年施行された外来生物法に「ノネコ」を入れたが、増加の抑制や生態系からの排除はほとんどされていない。貴重な自然地域ですら猫の排除を急ぐ様子がないのは、実際のところ猫が生態系に及ぼす脅威が把握されていないせいだろう。

猫がどのくらい野鳥を捕るかの定量調査を行った米国の例を紹介しよう。米国の猫数は1億頭をゆうに越え、実施された45件の調査結果を総合すると、温帯地域で1頭が年30～48羽の野鳥、177～299匹の小型哺乳類、4～12匹の爬虫類、2～5匹の両生類を捕殺し、全米の猫が殺す野鳥は1年に実に13億～40億羽、哺乳類は63億～223億匹に及ぶと推定されている。日本列島の自然生態系は、島効果でもともと脆弱で、肉食の頂点捕食者がいないほとんどの島嶼では、とりわけ猫の破壊力は言葉に尽くせないほど大きい。私が長く通った伊豆諸島の御蔵島の例を紹介しよう。

御蔵島は都心から南へ200km、直径5km、面積20km<sup>2</sup>、標高851mの山岳の有人島で、東アジア固有繁殖海鳥のオオミズナギドリの世界最大の繁殖地で知られる。1978年の繁殖数調査時に175～350万羽が推定されたが、今世紀の5年毎の調査で激減が浮き彫りになり2016年には約11万羽にまで減った。40年間で実に93～97%減の壊滅状態だ。この最大要因の一つが猫である。繁殖地には首をもがれたオオミズナギドリの死体が転がり、夜の繁殖地は懐中電灯の光に猫の両眼が反射する。

村役場はこれまで約430頭を捕獲し不妊去勢後にやむなく島内放獣してきた。2015年を皮切りに毎年15頭余りを里親に預けるために私たちも加わって島外搬出もするが、猫の繁殖力の前では数の抑制効果を持たない。



ノネコに首を刈られて地面に横たわるオオミズナギドリの死体  
(御蔵島、撮影：岡)

オオミズナギドリの繁殖集団が絶滅すれば、糞による海の栄養の陸揚げ効果が失われ、窒素やリンの供給が断たれ、島の生態系がやがては足元の土壌から崩れ去る。

猫は不妊去勢し屋内で飼うことが鉄則である。覆水は盆に帰らずの言葉通りに野に放たれた猫は、自らの狩猟本能で日本の自然生態系を間違いなく崩壊に導く。私たちの貴重な自然を未来に手渡すために抜本的な猫対策の実施を急ぐべき時がある。

(おか・なりこ)